棋士の情景

～勝負の厳かさは、どんな時代も変わらない～

棋士・九段　島　朗

（第１話）

忘れられない観戦記

島 朗（しま あきら）1963年、東京都生まれ。1980年四段（プロ入り）。
タイトルは竜王1期、タイトル戦は6回出場。
震災以前から特に東北地方の普及に注力している。
猫と遊び、ピアノや国道走破のYouTubeを楽しみ、若手や後輩の最新の将棋を鑑賞、学習するのが何より日々の生きがい。

読者の皆様はじめまして。今月からエッセイ風の文章をしばらくの間担当いたします、将棋棋士の島朗と申します。藤井聡太さん、また彼を追走するトップ棋士でもなければ、将来を期待される若手でもない自分が？という気も少々致しますが、これも良いご縁かなとご依頼を拝受しました。

皆様から長年将棋文化に多くのご支援を頂いていることに感謝の意を表するばかりです。現役生活も45年目で上から下まで多くの立場を経験できたのはありがたく、勝負の世界に明け暮れた中で、皆様に何か感じてくださることがあれば幸いです。

現役棋士にとってタイトル戦は夢の舞台。いまは二人のみがタイトルを保有する状況（藤井聡太七冠・伊藤匠叡王）ですが、いつの時代もごく少数のトップ棋士が独占・寡占することは実力の世界では当然のことです。

自分はその昔、初代の「竜王位」にたまたま就いたものの、今では夢を見ていた気もして漠然と思い出す意識がほとんどです。むしろ後年、羽生善治七冠の無敵時代に何度か挑戦者になれて、挑戦で満足しストレート負けを喫していた経験の方が日常に近く、現実感があるのは不思議です。

その中で印象深い記憶に新聞観戦記がありました。ネット中継などの環境がある現在と違って、ファンの方が棋譜を見られ、対局の雰囲気を描写したことを伝える、唯一の手立てである観戦記は、今よりとてつもなく大きな意味を持っていました。

通常、将棋専門の観戦記者が担当する場合が多いのですが、王座戦という当時の七大棋戦（現在は八大タイトル）の一角に挑戦できたとき、そのうちの一局を日本経済新聞がタイトル戦ゆえ特別な外部の方として、作家・翻訳家の常盤新平先生にご依頼し、観戦願える機会がありました。

私は日本の古典に全く疎いのですが、若い頃からアメリカ文学の翻訳本は大好きで、中でも常盤先生の著される『ニューヨークは闇につつまれて』に代表されたアーウィン・ショーの作品は全て、何十回と読み直したものでした。その憧れの方が、自分の観戦記を書いてくださるのは、何という偶然で幸せな出来事でしょうか。

地方の名旅館で行われる対局の前の日、勝負の緊張より、常盤先生にお会いできるのが素直に嬉しかったような。ファン目線での率直な思いを表すと、シャイな先生は恥ずかしげにされていたのを今も思い出されます。後日観戦記が掲載され、大意は下記のようなものでした。

「長い作家生活で初めて、将棋の観戦記を書くことになった。羽生王座の対局を直接観戦できるとは思わなかったが、挑戦者の島八段が、私の作品を愛読していると告げられたときは、さらに驚いた。対局前夜、拙著の訳した一節を島八段が諳んじるのを聞いたとき、こうした青年に思いがけず影響を与えていた事実を知り、私の続けてきた仕事にも、何らかの意義があったのかも知れない。」

先生は2013年に天寿を全うされた。いまでもご著書を読み返す度、あたたかい空気が感じられるような気がする。